

子どもが生成AIを活用する授業づくり

レクチャーアーカイブ動画

視聴時間 約13分

実践事例① 生き物の分類

～実体験×生成AIで広がる「思考の拡張」～

導入：教室が「森」になった日

五感をフル活用したリアルな観察

理科室に16種類の生きた生き物や標本(アカテガニ、ベタ、コウモリの標本など)を配置し、実体験に基づいた学びのスタート地点としました。



探究のプロセス：自分 vs 生成AI

ステップA: 自分の視点で分類する

住んでいる場所、動き方、食性



ステップB: 生成AIとの対話と比較

自分の観察事実を生成AIに伝え、AIの分類案と比較します。



まずは自力で『住んでいる場所』や『動き方』など、直感や観察に基づきくま分けを行います。

『脊椎動物』や『食性』といった科学的な分類軸に触れることで、生徒たちの観察眼がより専門的なレベルへと拡張されました。

思考のアップデート

『脊椎動物』や『食性』といった科学的な分類軸に触れることで、生徒たちの観察眼がより専門的なレベルへと拡張されました。

驚きの成果(データで見る変容)

観察力の劇的な深化

視覚以外の情報(音や感触)を含めた具体的な記述が増加し、表現の解像度が向上しました。

批判的思考の芽生え

AIの回答をそのまま受け入れるのではなく、『AIも人間がまとめた情報に基づいている』と気づき、情報の妥当性を自ら考える姿勢が見られました。

「最後は人間が情報をまとめるスキルが必要なんだ。」

生成AIを『思考の足場』として使いこなし、自分自身の判断に責任を持つ自律的な学びが生まれました。

教師の魔法(伴走者の役割)

心理的安全性を高める声掛け

『全部正解! 自信を持って分類してごらん!』

生徒一人ひとりの視点を全肯定し、主体的な挑戦を促します。

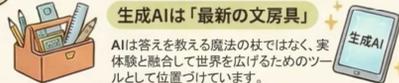
自律を促す一言

『最後は自分で決めなさい!』

AIに依存せず、自分なりに納得解を導き出す姿勢を支えます。

生成AIは「最新の文房具」

AIは答えを教える魔法の杖ではなく、実体験と融合して世界を広げるためのツールとして位置づけています。



プロセス②：生徒へのオリエンテーション

事前アンケートによる不安の可視化と解消



- 個人情報(絶対)に入力しない
- AIの答えを鵜呑みにしない
- 最後は自分で判断する

実践事例②：光の性質(概念への橋渡し)

活動内容：8つの不思議な光の現象を体験。

プロセス：
1. 体験：「なんか曲がった!」
2. 対話：気づきを生成AIに入力
3. 概念化：AIが「屈折」「全反射」などの用語と結びつける

探究の深化：生成AI×探究サイクル



事例：実測値と理論値のズレを生成AIと分析し、誤差の原因を自律的に振り返る。



子どもが生成AIを活用する授業づくり

～実体験と生成AIが融合する探究の姿を目指して～

名寄市立名寄東中学校 主幹教諭 安田佳史

< 動画視聴 >



令和8年2月20日、名寄東中学校で安田佳史主幹教諭が中1理科の公開授業を行いました。

公開授業後、レクチャーを行いました。安田主幹教諭が改めてレクチャーのアーカイブ動画を作成してくれたので、皆さんに共有いたします。

動画視聴後、ぜひ、右下のアンケートにもご協力をお願いいたします。

